

駿建

2016 Apr. vol.44 No.1

日本大学理工学部建築学科 日本大学短期大学部建築・生活デザイン学科

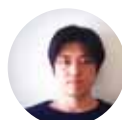
SHUNKEN

Quarterly Journal of

Department of Architecture. College of Science and Technology, Nihon University
& Department of Architecture and Living Design. Nihon University Junior College



That's why architecture is fun



Special Future

現役生から先生、OB/OGが伝えたい。

だから、
建築は
面白い!

25



Special Future

現役生から先生、OB/OGが伝えたい。

だから、 建築は 面白い! 25

春です。新入生、進級生の皆さん、改めて、建築の世界へようこそ！なんとなく建築学科へ入った人にも、建築家になるぞ！と意気込んでいる人にも、とりあえず伝えたいことは、お世辞抜きで「建築って本当に面白い分野なんです！」ということ。じゃあ、どんなところが面白いの？って聞かれると、あれもこれもたくさんあります。だから今回は、在学生の皆さんや先生方、そして卒業して社会で活躍されているOB/OGの皆さんに、建築の面白さについて聞いてみました。建築って、どんなところが面白いのですか？

That's why architecture is fun

現役生から先生、OB/OGが伝えたい。

だから、 建築は 面白い! 25



南極昭和基地にてペンギンと遊ぶ三橋先生

01

極地の建築から 宇宙不動産学へ

三橋博巳（1966卒業、1968修了）
：元日本大学理工学部教授



大学院生のときに南極昭和基地の建築の設計に参画したことで、第19次日本南極観測隊に参加し、設計した建築の建設と研究観測、越冬生活を体験した。国内の建築と異なる極地の建築は面白い。21世紀は宇宙環境の時代になるだろう。宇宙空間の利用のあり方、宇宙の建築や宇宙不動産学に取り組むのも面白い。建築は芸術的作品であるが、竣工後は資産すなわち不動産の視点で考えるのが重要である。芸術、技術のみならず、建築を取り巻く社会的な課題解決のためには、法律や経済など総合的な幅広い知識も不可欠である。企画経営コース（学部）、不動産科学専攻（大学院）で学ぶ建築・都市・不動産は、領域も広く、多様なアプローチで面白い。だから、建築は面白い！

駿



南極で設計・建設した地学棟

02

歴史的建造物は 何かを語り続ける

飯泉 洋（1991卒業、1993修了）
：東京都都市整備局耐震化推進担当部長



東京は関東大震災や先の大戦の空襲で焼け野原となった。歴史的建造物はこのような難局を乗り越えてきており、それゆえ建設当時の社会情勢を無言で語りかけてくれる。例えば、大震災後に建設されたいわゆる「復興小学校」のひとつである中央区立常盤小学校は、優美なデザインと頑丈さを兼ね備えており、当時目指していた「一等国」の首都にふさわしい街をつくり、震災に対して二度と大きな被害を出さないという東京市民の強い意気込みが伝わってくる。昨今、都心部を中心に進められている都市再開発による超高層ビルもいずれ歴史的建造物となる。将来どのようなことを語るようになるのか、楽しみである。だから、建築は面白い！

駿



「復興小学校」のひとつ中央区立常盤小学校



西尾さんが描く、将来のまちなみ

03

「街」を通して、人を捉える「街づくり」

西尾茂紀（1983卒業、1985修了）
：森記念財団都市整備研究所上級研究員



学生時代、モダニズム建築の反動として現れたポストモダニズムが全盛で、装飾性、折衷性、過剰なデザインを再評価する動きがありました。機能主義を批判的に捉えた結果と理屈では分かっていても、何が腑に落ちませんでした。「都市・建築のデザインや計画の中心には人がいて、それは特定の人のためではなく、市民のために、また市民とともにつくられるものである」というホセ・ルイ・セルトの言葉に出会ってからは、「街」を通して、人を捉えることが「街づくり」と考え、東京区部の都市構造の将来予測とまちづくりを提案することに従事してきました。最近では、「街は育てるのもの」と考え、エリアマネジメントの研究も行っています。将来の東京が、生活するすべての人々にとって魅力的なエリアの集合体になるように研究にそしんでいます。だから、建築は面白い！

駿

04

建物は、そこに建ち続けるからこそ

長井俊明（2004卒業）
：鹿島建設開発計画部課長代理



私にとって「建築」とは、「各々が世界で唯一無二のものとして存在しており、かつ施主または利用者以外にも強制的に影響を及ぼす可能性のある物体」だと考えています。前段は言わずもがな、土地自体が唯一無二であり、その土地の上にある建物も同じものはひとつとしてありません。後段については、建物をつくる施主や訪れる利用者は自らの意志でその建物に関与しますが、通りすがりの人にとっては、自らの意志とは関係なくそこに存している建物と遭遇します。現在、不動産開発業務に従事する中で、「建築」とはそれだけ人に与える影響が大きい分、社会への働きかけも大きく、責任とやりがいを感じられるものであると日々実感しています。だから、建築は面白い！

駿

東京・汐留から見る都市の風景



横浜ランドマークタワーから見るみなとみらい21の開発

05

あらゆる分野を横断する刺激

深山大輝（2016卒業）
：不動産科学専攻M1



私は学部では企画経営コースで建築について学びました。そこでは建築物を「不動産」として捉え、民法などの法律や経済学、不動産経営にはじまり、都市計画や建築の企画開発から設計、資金計画、維持管理などを幅広く学びました。そんな私にとって、建築の「企画」は、一番興味が、面白い分野です。「企画」には単に建物を建てるための技術的な知識はもちろん、敷地・建物に関してのさまざまな調査や権利調整、設計、竣工後の維持管理、そしてプロジェクトの全体の経営・収益など多くの知識が必要です。「企画」では、それらあらゆる分野に関わりながら、意見を交えることができ、自分の考えに刺激を受けるきっかけになります。だから、建築は面白い！

駿

現役生から先生、OB/OGが伝えたい。

だから、
建築は
面白い! 2506 建築を学べば、
日々新しい発見が渡部雄大 (2015卒業)
：建築学専攻M2

私は、デザインなどに興味があり、意匠設計をやりたくて建築学科に入学しました。しかし、現在では建物内の「音」について研究を行っています。なぜ意匠設計を志望していたのに「音」について研究をしているのかというと、きっかけは、「環境工学II」という授業との出会いです。授業では、室内で発生した「音」が、隣の部屋ではどのくらい聞こえるのかを計算したりしました。「音」の計算などが面白いと思い、「環境工学II」との出会いからは、「音」の分野にのめりこんでいます。休日はサイクリングで、建築を見学に行っています。「音」の分野と設計は関わりがあり、吸音材などを使用した建物を見ることもできます。建築を学ぶことで日々、新しい発見があります。だから、建築は面白い!

駿



サイクリングで建築見学に行ったときの写真。場所は川越にある「川越城本丸御殿」

07 歴史をつくり、
未来をつくる!井上勝夫 (1973卒業、1976修了)
：建築学科特任教授

人類の歴史を語る上で、史実を検証、証明できるものって何でしょうか。いろいろな資料や出土品などがありますが、時代や背景を三次元で具現化した建築は情報量的にも一番手に挙げられるのではないのでしょうか。建築には、生活、文化、経済、社会、技術などが事実として詳細に反映され、未来へと受け継がれています。たとえば、縄文期の竪穴住居からはじまり、高床式住居へ……。さらには、高層の鉄筋コンクリート構造へと変化し、現代では600mを超える超高層建築へと進化しています。さて、将来はどんな建築や街、都市が歴史として創られてゆくのでしょうか。それは皆さんが、どんな未来を創ろうとしているにかかっています。なんとやり甲斐のある分野ではないか。だから、建築は面白い!

駿



建築途中のスカイツリー



08 建築の世界が なくなることはない！

原 順 （1995 卒業、1997 修了）
：大成建設東京支店建築工事作業所長



子供の頃、模型づくりに夢中になった。完成形を想像しながら、徐々にその形に近づく過程が楽しくて仕方がなかった。いま、作業所長として地図に残るほどの建物をつくっている。ものづくりへの想いは、子供の頃に抱いた想いと何ら変わらない。違いがあるとすれば、大勢の仲間を束ね、限られた時間と予算の中で品質や安全を確保し、建物を完成させること。また、20年前の入社面接で答えた志望動機の一字一句が、いまそのまま実現していることも個人的には非常に感慨深い。10年後、世の中に存在する多くの職種が別の新たな職種に生まれ変わると言われるが、どんなにIT技術や機械化が発展しても、人々がそこに生きている限り、建築の世界がなくなることはない。だから、建築は面白い！

駿

原さんが施工担当した「御茶ノ水ゾラシティ」の模型

09 ゼロから創造する こんな仕事は他にない

小松宏之 （1986 卒業、1988 修了）
：大林組広島支店建築設計部設備設計課



中学生のとき図面を描くのが好きだった私は、親に洗脳疑惑（笑）を抱きながらも、希望通りに建築学科へ進み、趣味と実益を兼ねた音響系環境研究室を経て、当時は3K（きつい、汚い、危険）の代表のように言われていたゼネコン（総合建設業）を迷わず選び、建築業界に飛び込みました。ゼネコンは、事務所、工場、病院、老人福祉施設、学校、劇場、ホテル、ショッピングセンターなど、多種多様なジャンルの建物を扱います。私は設備設計部門に身を置くことで、建築という世界の知識を駆使し、使う側のさまざまな人々と直接対話をしながら想いを共有することで、一緒にゼロから作品を創造していく仕事をしています。こんな仕事は他にありませんよ。だから、建築は面白い！

駿



小松さんが担当した「ららぽーと甲子園」

10 設備から見える ひとびとの生活

井口雅登 （2000 卒業、2002 修了）
：建築学科助教



住宅の暖冷房設備の研究では、実際の住宅で、ある条件を変化させた前後の温熱環境がどう変わるか比較することがあります。しかし、このような比較を厳密に行うことは無理だといっても過言ではありません。まず、比較する時点の気象条件は同じになりませんし、室温はそれまでの壁などの温度が時間遅れで影響してきます。それに、発熱体となる居住者自身や照明、家電製品がいつどの部屋でどれだけ発熱するかという生活スタイルは、毎日少しずつ変わります。ですから、住宅の暖冷房設備の研究をしていると、地域ごとに異なる気候を体感したり、多様な居住者の生活が垣間見えたりして、建築を通して日々いろいろな発見があります。だから、建築は面白い！

駿



井口先生の自宅の小屋裏に設置された実測中のエアコン

現役生から先生、OB/OGが伝えたい。

だから、 建築は 面白い! 25



羽鳥先生が担当したオフィスビル「コ・ブ共済プラザ」の窓辺

11

何かを育てるような 建築をつくる楽しさ

羽鳥達也（2014・非常勤講師）
：建築家・日建設計設計部部長



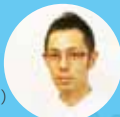
私は小さい頃から絵を描いたり、工作するのが大好きでしたが、あるとき、より人の役に立つものをつくりたいと思い建築を志しました。これを読んでる人にもそのような人が多いでしょう。しかし、実務での面白さは想像していたものとは一味違ったものでした。建築の設計は施主の要望をもとにユーザーを想像しながら育てていく「栽培」に近く、どんな「果実」を得るためにどのような設計にするのか、条件を整えていく打合せや作業は「耕作」に近いのです。何かを育てた経験がある人は分かると思いますが、いつも発見があり、予想外のことが起こります。建築の設計を経験する度に、自分の常識が覆され、目の前にある世界の見方が更新されていくのです。だから、建築は面白い！

駿

12

ワクワクが 止まりません！

江泉光哲（2004卒業、2006修了）
：建築家・4FA共同主宰



「気取らない建築がいいな」と思ってます。大学院を修了後、アトリエ事務所 で建築を学び、今は大学時代の仲間と設計事務所を主宰しています。犬舎から住宅、日替わりカフェから直売所まで。規模も大きさも違ういろんな用途の建築を設計してきました。その中で大切にしているのは「建築が完成したら終わりではなく、そこからがはじまり」ということです。使われ方を想像しながら設計しても、その想像をはるかに超えて建築が使われることが多くあるので、なるべく気取らない建築が良いと思うのです。それから、さりげないやさしさも。そんなことを考えながら建築を創造し、使われ方を想像する。また、建築を体験・観察することで常に新しい発見と感動が生まれます。その繰り返しです。ワクワクが止まりませんね。だから、建築は面白い！

駿



江泉さんが現在計画中の「ふくしまプロジェクト」。動物愛護団体の皆さんと想像した将来ビジョンのイラスト © Shoko Terata



学部2年の夏、谷中にあるHAGISOで行われたデザインワークショップに参加した

13

人との対話が、 こんなにもあるなんて

横山大貴
：建築学科4年



建築を学びはじめて4年目、僕はこれまで建築という分野を通してたくさんの人達と出会ってきた。建築学科を志望したのは「デザインがしたい」という単純な理由だったけれど、学びはじめると、ひとつの建築ができるまでには、施主、設計者、構造設計者、設備技師、施工管理者と、さまざまな分野の人たちが携わっていて（厳密にはもっともっと多いけど）、想像していたような単純な世界ではなかった。自らのアイデアや感覚をデザインとして社会へ還元する作業がある一方で、人と人の対話の中で生み出されていくものでもあることは興味深いと思うし、他分野にはない建築のひとつの魅力だと思う。だから、建築は面白い！ 駿

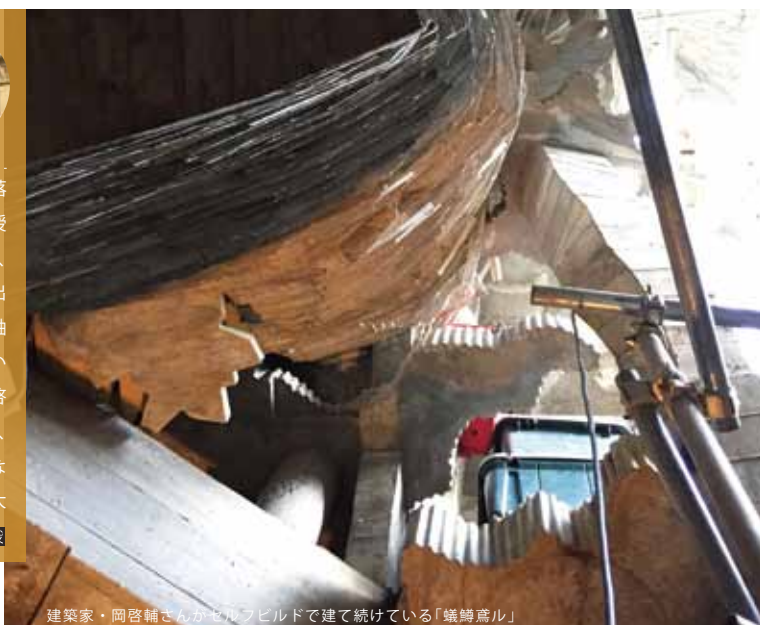
14

正解も絶対もない、 その面白さ！

倉田慧一
：建築学科2年



悲しいかな意識の高い君たちも、GWを過ぎたころには晴れて自堕落なクソ大学生だ。そんな君たちへアドバイス。1年生の間は不毛な授業ばかりで建築学科なんて面白くないと思うかもしれない。しかし、それだけで建築のすべてを知った気になるのは早計に過ぎる。外へ出よう。大学によってカリキュラムは差があるし、何より建築の評価軸がまったく異なる。東京は有名な建築がたくさんあるし、そうでないアノニマスな街並みも示唆に富んでいる。そこで出会ったのが、岡啓輔さんのセルフビルドによる「蟻鱈鳶ル（ありますとんびる）」。先日、はじめてこの建物を訪ねて、建築とは設計とは何なのか分からなくなり、1週間寝込みそうなほど衝撃を受けた。建築に正解はないし、大学が絶対でもない。不安かもしれないが、だから、建築は面白い！ 駿



建築家・岡啓輔さんがセルフビルドで建て続けている「蟻鱈鳶ル」

15

どこに着地するか わからない

関本竜太（1994卒業）
：建築家・リオタデザイン主宰



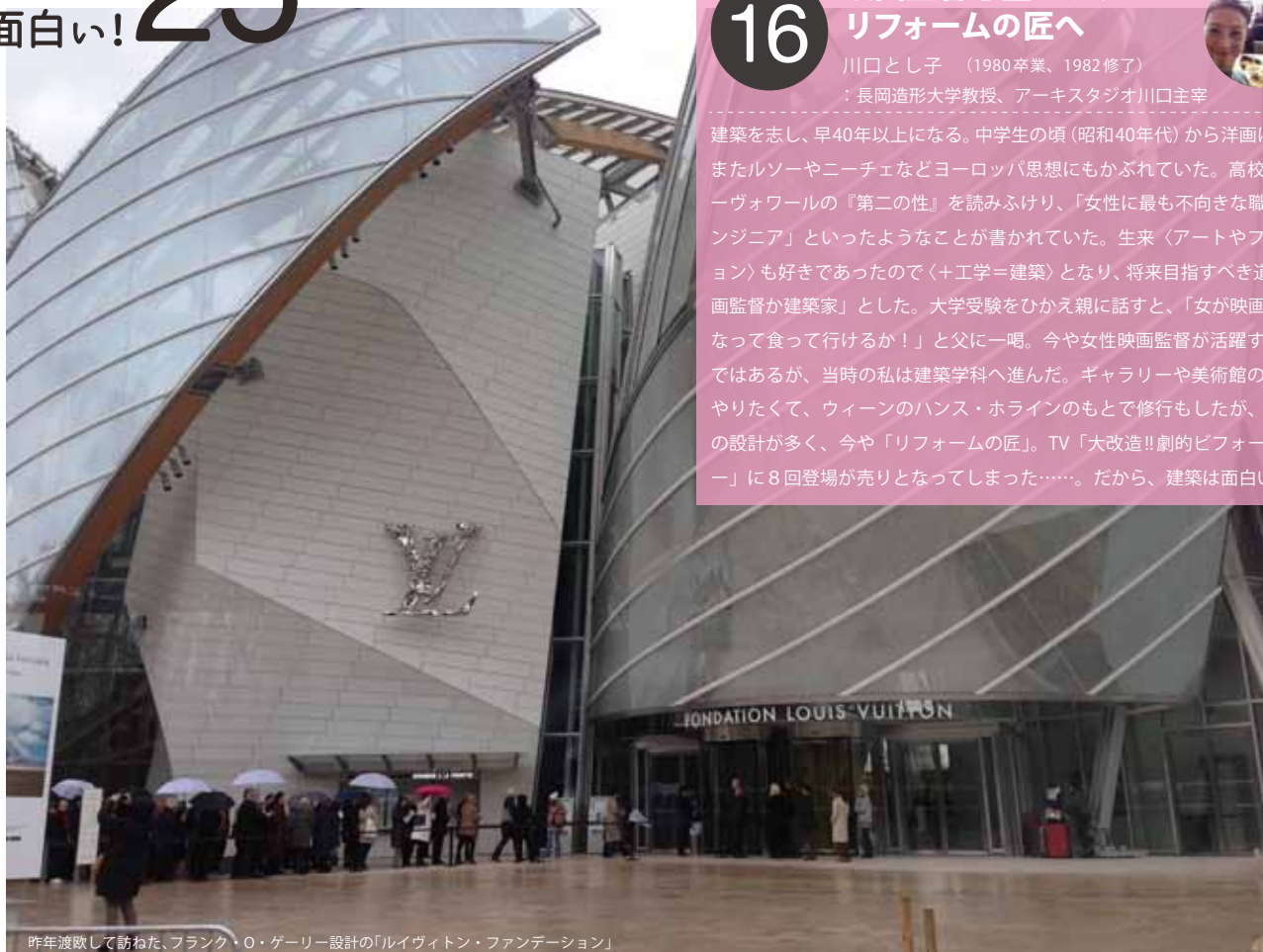
大学では先生を相手に設計指導を受けることになると思うが、実際の施主とのやりとりはもっと生々しく、厳しく、理不尽に溢れている。ただその中でも必ず理があり、導かれる先には驚きと発見がある。施主とのライブなやりとりがたまらなく好きだ。時にすべてがひっくり返り、その場でまったく新しいプランが生まれることもある。破壊と創造がそこにはある。だから構えてはいけない。両腕をだらりと下げて、ノーガードで打たれるのだ。そのうち相手の動きが読めてくる。するとやんわりとかわず術もわかってくる。建築とは、人と人が向き合った瞬間に放たれる火花のようなものだ。どこに着地するかは誰にもわからない。だから、建築は面白い！ 駿



真っ白な敷地図の上に、その場でヒアリングをしながら1案つくる。建築は対面の中からしか生まれない

現役生から先生、OB/OGが伝えたい。

だから、 建築は 面白い! 25



昨年渡欧して訪ねた、フランク・O・ゲリー設計の「レイヴィトン・ファンデーション」

16

映画監督志望から、 リフォームの匠へ

川口とし子 (1980卒、1982修)
：長岡造形大学教授、アーキスタジオ川口主宰



建築を志し、早40年以上になる。中学生の頃(昭和40年代)から洋画に夢中、またルソーやニーチェなどヨーロッパ思想にもかぶれていた。高校生でボーヴォワールの『第二の性』を読みふけり、「女性に最も不向きな職業はエンジニア」といったようなことが書かれていた。生来〈アートやファッション〉も好きであったので〈+工学=建築〉となり、将来目指すべき道は「映画監督か建築家」とした。大学受験をひかえ親に話すと、「女が映画監督になって食って行けるか!」と父に一喝。今や女性映画監督が活躍する時代ではあるが、当時の私は建築学科へ進んだ。ギャラリーや美術館の設計がやりたくて、ウィーンのハンス・ホラインのもとで修行もしたが、住宅系の設計が多く、今や「リフォームの匠」。TV「大改造!! 劇的ビフォーアフター」に8回登場が売りとなってしまった……。だから、建築は面白い! 駿

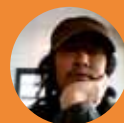


画家レンブラントの初期傑作「アトリエの画家」© Museum of Fine Arts, Boston

17

歴史から本質を見出し、 現在とも相対化する

福山博之 (2009-非常勤講師)
：建築家・福山建築事務所主宰



設計した画家のアトリエが工事中です。建築は一般的に社会的で、求められることは変化し続け、流行も生まれます。一方、画家のアトリエは古くから数多く存在しますが、「そこに共通する普遍的価値は?」から設計ははじまりました。レンブラントの「アトリエの画家」にはじまり、100以上のアトリエの写真の収集からぼんやりした判断が生まれます。ル・コルビュジエやメリーニコフ(いずれも近代の巨匠建築家)の絵画アトリエの研究を通じて、ぼんやりが確信に変わると同時に、当初の検討に何故だか満載されていた今日的建築流行の断片が、順次、案から消えていきます。歴史から本質を見出しながらの現在の設計行為によって、流行あるいは社会さえも相対化し、「建築とは」を浮き彫りにできるかもしれないと考えては挫折します(ポジティブに)……。だから、建築は面白い! 駿



中村さんが働く同ビルのおフィス。建築家・西沢立衛設計によるもの

18

言葉がなくても伝わること 言葉と共に伝わること

中村光恵（1996卒業、1998修了）
：新建築社「JA」編集長



新建築社の書棚には、出版している雑誌のバックナンバーが並んでいます。『新建築』（創刊1925年）、『新建築住宅特集』（1985年）、『JA』（1956年）、『A+U』（1971年）で、それぞれの雑誌を創刊当初から改めて見返してみると、建築の変化、建築雑誌の変化がとてもよく分かります。50～60年前の雑誌は、写真が主体で図面もデフォルメされた記号のような情報のみ。無言な世界ながら、でもそれに納得させられます。今はどうでしょう。たくさんの情報をより早く手に入れることができる状況で雑誌にも文字が溢れています。よく読み込まなければ、納得する回答は得られません。言葉がなくても伝わること、言葉とともに伝わること。時間とともにある建築の面白さを、建築雑誌は伝え続けています。だから、建築は面白い！

駿



ベトナム調査をはじめた数年間、ミーソン遺跡に野宿して実測調査を続けた。重枝先生の研究の原点だった

19

失恋したら 旅に出よう

重枝豊（1977卒業、1980修了）
：建築学科教授



すでに失恋という言葉は死語かもしれないが、他人に理解されないという経験は誰もあるだろう。そのとき、一冊の建築の本を持って旅に出てほしい。本を開いて「違うんだよね、私は」と最初につぶやいて自分の言葉を吐いてほしい。何かを失ったという焦燥感人を詩人にしてくれる。肯定ではなく「ここがだめなんだよね」とつぶやいたとき、人は生まれ変わっているはずだ。過去の価値を否定したときに、あなたそのものがみえてくる。自分の建築に対する夢を口に出すことが、自分の夢の実現に一歩ふみだすことなのだ。そんな心に焼き付けた建築を再訪してみると、自分の成長がまた、違った角度でみえてくる。だから、建築は面白い！

駿



椎名さんが設計した「森 FOREST」と名付けた住宅。玄関ドアを開けると流動的空間が展開する

20

空間を感じる喜びが 僕を大きく駆り立てる！

椎名英三（1967卒業）
：建築家・椎名英三建築設計事務所主宰



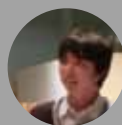
素晴らしい！と僕は思った。中学3年のときだ。それはF.L.ライトをモデルにした主人公の創造的建築家ハワード・ロークが、自身の信念を曲げずに保守的な社会と戦いながら最後に勝利するという映画だった。主人公もその建築もカッコよかった。僕は建築家を志した。さまざまな表現領域があるが、物質的存在として建築は大きいものだ。そんなにも大きなものをデザインできるなんてすごいじゃないか！それは建築がファインアートではなく、人々の役に立つからなのだ。そして、建築は物質によって構成されるが、物質を超えた空間へと至らなくては面白くない。建築の本質は空間であり、空間を感じる歓びこそ、僕を駆り立てるもののなのだ。だから、建築は面白い！！

駿

現役生から先生、OB/OGが伝えたい。

だから、
建築は
面白い! 25

21

建築を学べば、
日々新しい発見が宮内 隼 (2015卒業)
：建築学専攻M2

建築の魅力を知るには、実際に訪れることが大事だと思います。建築の雑誌などを見てみると、カッコいいパースや、図面が載っています。自宅で見ても楽しいのですが、実際に訪れてみると、雑誌とは違った印象を受けることが多くあります。建築は人が利用することで初めて魅力が出てくると思います。建築を利用する人や周辺環境と一緒に空間を体験することに魅力があります。そのため、訪れる季節や時間によって、建築の表情は様変わりします。人間の手によってつくり出されるもので、建築ほど大きく、多くの人が関わり、つくられた後も利用者によってその様子が変わるものは他にありません。だから、建築は面白い!

駿



夜の「金沢 21 世紀美術館」

22

一度味わったら
やめられません!瀧口真衣子 (2005卒業、2007修了)
：日建設計エンジニアリング部門

建築の面白さは、つくり手が滲み出るところにあります。同じ条件が与えられても、設計者によって全く異なる空間が生み出されます。建築は、設計者の想いをはっきりと映し出し、そこに生まれた空間が魅力的であれば、多くの人が集まります。ちょうど、魅力的な人の周りには人が集まってくるように。自分が全力で取り組んだ結果生まれてきた建築は、自分の子供のように大切に思えます。わたしの建築、たくさんの人に好かれてほしい。とても嬉しい反面、もっと良くしてあげられたのではないかという反省も、少なからず出てきます。そういった気持ちもひっくるめて、設計という仕事を続けるためのやりがいであり、モチベーションとなります。これは一度味わったらやめられません。だから、建築は面白い!

駿



瀧口さんが最近設計した建物の庇。意匠や現場とのやりとりがいろいろあって、思い入れのある建物



23

命を吹き込み、 羽ばたかせる感動

中島 肇 （1981卒業、1983修了）
：建築学科教授



設計から施工に至る“ものづくり”には、想像力と創造力が大切である。張力を導入することにより成り立つ膜構造やケーブル構造のようなテンション構造、あるいは張力を導入することにより形状や応力をコントロールする張弦梁構造には、特にこの2つの力が重要である。これらの構造は、設計する段階でどのように施工（創造）するかを想像しながら設計を進める。知識、技術、感性、経験など、全身全霊を駆使した自分自身の想像力との真剣勝負である。張力が導入され、想像した通りに施工できたとき、構造物には命が吹き込まれ、自立して宙に浮く。想像通り、あるいはそれ以上の個性が生まれ、大きく羽ばたいていくとき、感動し熱い想いが込み上げる。だから、建築は面白い！

駿

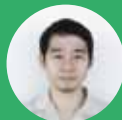
命が吹き込まれ自立して宙に浮く構造体



24

日常の風景にも アイデアが潜む

大野博史 （1997卒業、2000修了）
：構造家・オーノJAPAN主宰



ごそごそと靴の底から電卓を出してパンパシと叩く。柱を45角にするなら座屈長さを2.2mに抑えれば良いんだよな。一人電車の端の席に座り考えていると、ドア脇で佇んでいる人の靴と肘が当たった。「あ、ごめんなさい」お互いが小さく会釈する。座席端にはついたてと、手摺棒があり、それが緩やかに天井付近でつり革棒につながっている。そんな棒をなんの気なしに眺めていたとき何かが閃く。確かあの柱付近には造り付けの椅子があったよな、あれを座屈止めに利用できるんじゃないかな。もらっていた意匠図を確認する。確かにそこには長椅子があり、ちょうど背もたれを除いた柱高さは2.2mだった。柱が小さくなってくると気になっていた窓周りの構造が俄然スッキリしてくる。ひとり小さな喜びに浸りつつ思う。いやー、だから、建築は面白い！

駿

ついたてと手摺棒がゆるやかに天井でつり革につながる

25

感性を育む 材料施工教育

和美廣喜 （1968卒業、1970修了）
：島根大学名誉教授



大学は、感性や創造性を育む格好の場所である。学生は、知識偏重教育の弊害で、幼児期に育まれた感性が停止した状態で入学してくる。だから、大学では、体験学習を通じて多様な感性を育む基本的な訓練が必要となる。立派なマニュアルや設計図にもとづいて施工しても、建築のでき栄えは種々異なる。それは、現場の最先端で働く施工技術者の多様な感性に依存するところが多いからである。私は、材料施工研究室の中田善久教授のもとで、5年余に亘って非常勤講師をさせていただいた。年2回ほどの研究室の合宿に参加することが何よりも楽しみで、学生は、OBとともに珍芸を演じ、ささやかな社会性も身に付ける。施工管理技術者として一人前になるには、10年以上の歳月を要する。社会は即戦力になる人材を大学に求めるが、材料施工分野の教育ではとうてい無理である。しかし、そこには、絶えず創造を巡らす面白さがある。だから、建築は面白い！

駿



合宿におけるOBとの交流風景

駿

修士論文
環境系

研究は、世界中で自分がその分野の第一人者だということ

齋藤賞

減衰除去インパルス応答を用いた室内音場の周波数特性の解析

鈴木諒一くん (M2・羽入・星研究室)

小 さい頃から音楽をやっていた鈴木さんは、大好きな音楽を演奏する空間について研究している、羽入・星研究室へ入った。学部生のときはバンド活動を通して、音楽スタジオをよく利用していたことも影響し、修士論文では小空間の音響設計手法の確立を研究テーマとした。

音響障害が発生しやすい音楽スタジオなどの小空間の音響設計においては、従来の手法では測定点ごとに周波数特性が大きく変動し、残響減衰によって周波数分解能が低下するなど、定在波を正確に把握することができなかった。本研究では、

従来の音圧による解析だけでなく粒子速度も考慮し、室内インパルス応答の残響減衰を除去することによって、測定点ごとのばらつきを抑えつつ、周波数分解能を大幅に高める新しい周波数解析手法を提案し、有効性を示した。

「波動音響シミュレーションという数値計算手法をいちから勉強して、そのソフトウェアを自らプログラミングしました。プログラミング言語から勉強したので大変でしたが、すべてのプロセスを理解できている、自信をもって研究することができました」

修士論文
構造系

悩んで手を動かし続けた先に、新たな発見があった

齋藤賞

ケーブルを用いたスポークホイール型大観覧車の地震時挙動に関する基礎的研究

宮本悠平くん (M2・空間構造デザイン研究室)

学 部1年生のときに経験した3.11をきっかけとした地震動への関心と、かねてより興味があったケーブル構造を絡めた研究を行いたいと考えていた宮本くんは、あるとき高さ60mを超える遊楽施設に対する法改正や2007年以降観覧車の新規建設がないことを知った。趣味でやっていたロードバイクからも発想を得て、近年海外で建設されている「スポークホイール型観覧車」に着目し、海外で建てていてなぜ日本にはないのか、日本に多いトラス型の大観覧車とどう違うかなど、地震大国日本で設計する上で地震時挙動を知る必

要があった。具体的には、スポークホイール構造の観覧車を取り上げ、地震時挙動について実験と数値解析の両面から検討を行い、適正なケーブル本数や初期張力、リングの断面などの構造基本計画時に有用なデータを提示した、新規性、独自性、有用性のある研究となった。

「参考となる観覧車の地震時挙動に関わる文献がないことに、とても苦労しました。実は、学部の卒業研究と研究の対象が同じだったので、さらにどこまで内容を掘り下げて研究を進められるか、プレッシャーとの闘いでもありました」

修士論文
計画系

論文は、自身の建築観を文字で思い描くようなもの

吉田鉄郎賞

昭和初期における「新興建築」の理念に関する研究

—「新興建築家聯盟」の結成背景と参画者の活動の分析を通じて—

今野政憲くん (M2・建築史・建築論研究室)

関 東大震災以降、「新しく興る」ことを意味する「新興建築」が議論され、当時はモダニズム建築だけでなく表現派や東洋趣味も「新興」と捉えられていた。そんな中、「新興」を正しく獲得しようとしたのが、昭和5年に結成された建築運動「新興建築家聯盟」(以下「聯盟」)だった。「聯盟」は、前川國男や山口文象、岸田日出刀など、著名な建築家が多く参集し、延べ100人程に規模を拡大した建築運動となった。しかし、目立った活動もなくデマによる政治的弾圧から僅か五ヶ月で崩壊を迎えたため、内実には着眼されていなかっ

たが、今野くんは、これらを明らかにすることをテーマに研究を行った。具体的には、創宇社同人・竹村新太郎の貴重な文庫資料を中心に研究を進め、結成者や企画・構想を整理していった。結果、「聯盟」は、「共同設計」や「組織的研究」が性格の組織となるはずだったことが分かった。

「現代には、設計するだけでは解決できない問題が蔓延しています。それらを明らかにし、解決する手段のひとつとして論文はあると思っていました。何よりも、自分の中の問題意識をいかにぶつけてみるか、が私にとっては重要でした」





自分の提案は人を楽しませる「新しい提案」になっているのか

吉田鉄郎賞

久屋大通公園における環境型雨水調整施設の計画

ー水循環に接続する建築・インフラ・ランドスケープデザインの混成型空間の提案ー

岩井都夢くん（M2・山崎研究室）

卒業設計で東日本大震災の津波で失われた街の保存と継承に取り組んだ岩井くんは、昨年の台風18号による豪雨で後輩の家が流された経験も重なり、「水害と都市」に目を向けた。また、調査で近年圧倒的な勢いで雨水が増加している経緯を知り、都市における水処理システムの更新を考えることとした。具体的には、従来の水系インフラに頼る「線的な水処理」を行う都市構造から、『個々の敷地で面的に水処理』するシステムを計画し、元来の平面から描く「Master-Plan」ではなく、水循環が行われる都市の断面から描く

『Master-Landscape』を提案した。敷地は、線的な水系インフラに頼りきった名古屋市（久屋大通公園）を対象とした。建築・インフラ・ランドスケープが相補的な役割を果たし、水循環に接続することで、雨水を担保する場と、名古屋に3つの要素が物理的・視覚的に繋がる新しい空間を創出した。

「全長2キロ、地下3層という広大な設計だったので、誰よりも手を動かし、話しの整理を行いながら提案を纏めるには大変でした。一方で、日大の中で見たことない、歴代の修士の流れを変えるような真新しい提案を行えたと感じています。」



研究の醍醐味は、自ら考え行動し結果が得られること

桜建賞

鉛直振動に対する年齢変化に伴う振動感覚特性の検討

内澤良太くん・座間康成くん・水田悠月さん・渡辺芳恵さん（4年・建築音響研究室）

居住性能評価指針として定められている鉛直振動感覚に対する性能評価曲線は、年齢に伴う変化が考慮されていない。そこで、年齢変化に伴う人間の振動感覚特性について、調査研究を行った。

加齢に伴う振動知覚の変化について検討するため、振動台を用いて高齢者と若者を対象とした閾値実験を行った。被験者に振動台の上に胡坐の姿勢で座ってもらい、4Hz、8Hz、16Hz、31.5Hz、63Hzの正弦波をランダムな順序で与え、上昇法と下降法を組み合わせた混合法により測定した。また、人間の

振動の大きさ感を調査するため、8Hzを基準とし、4Hz、16Hz、31.5Hz、63Hzの振動を十分に感じる大きさで評価曲線に沿った振動を負荷し、評価曲線と人間の感覚との対応を検討していった。

「チーム一丸となって同じ目標に向かって研究を進めることは、これまではなかなかできない経験で楽しかった。測定方法を決めること、そして被験者として高齢の方に集まっていたのは大変でした。しかし、そういった経験を含め、社会に出るための準備期間として、人として成長できたのではないかと思います」（座間）



卒業研究に取り組み、世界に挑戦する喜びを知れた

桜建賞

レンガ壁付き RC 造骨組の耐震性能評価のための数値解析手法の開発

ー国際的なブラインド解析コンテストを通じたアプローチー

赤井冬来くん、小川慶一郎くん、河野圭一郎くん（4年・RC 構造・構造解析研究室）

今回の研究は、クロアチアの研究チームが開催するブラインド解析コンテスト「FRAMA-2015 国際ベンチマーク」での内容だ。先生からコンテストの話聞き、著名な研究者が世界中から参加するということに惹かれて、迷わずチームで参加した。

具体的には、レンガ壁付き鉄筋コンクリート（以下、RC）造骨組を対象とした数値解析モデルの構築を試みた。レンガ壁は耐震性能の評価が難しく、未解明な部分が多いため、既存のRC造とは別に新しく数値解析の開発が求められた。解析モデルは、

解析精度の高いFEMモデルと解析時間の短いファイバーモデルの2つを構築した。前者はレンガとモルタル目地を個別にモデル化し、レンガ壁の複雑な破壊挙動を表現し、後者は、レンガ壁の復元力特性をFEMモデルから抽出することで、簡易に骨組の耐震性能を評価できる可能性を示した。

「一番大変だったのは、解析結果の確認の作業でした。誰かのデータが間違っていると、他のメンバーも解析をやり直さなくてはいけなくなることもありました。けれど、3人で頑張ることができたので、挫けずに最後までやりきれました」（小川）



Framed Masonry
Research Project



今まで学んだことが、つながっていく楽しさがある

桜建賞

中間層連結制震アウトフレームを用いた鉄塔構造物の制震改修方法

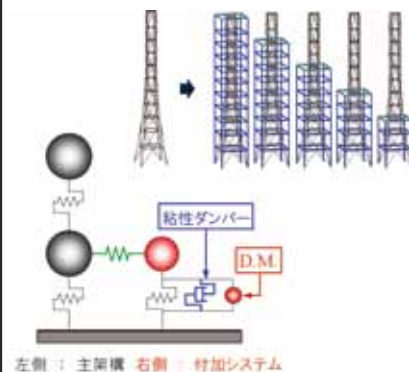
大沢 暁くん・本藤 洋介くん（4年・免・制震構造研究室）

これまでの鉄塔構造物の設計では、耐風性が重要とされ、耐震性はさほど重視されていない。しかし、想定より大きな近年の地震により、多くの通信鉄塔などは、損傷、倒壊の被害を受けている。今回の研究は、鉄塔構造物の新たな制震改修方法について検討するものだ。

建物の揺れを抑える方法に「制震」があるが、今回の研究では、ダンパーなどの制震装置を建物の内側に配置し、地震による揺れを制御するものではなく、実験体の外側にアウトフレームを組み、試験体と連結することで地震の揺れを低減させるもの。先

輩たちの研究の未完成な部分を引き継ぎ、鉄塔構造物をはじめとする高層の建築物に対して、「連結システム」を中間層につなぎ、制震効果を発揮することが可能なかを検討した。結果、今回の対象モデル（高さ30mの通信鉄塔）では、およそ半分程度の高さまで「連結システム」を下げて連結した際に、制震効果が得られることが分かった。

「卒業研究を進める中で、今まで授業で学習してきた知識の数々が、徐々につながって線となり、『こういうことだったのか』と、知識として理解を深めていく感覚が、とても楽しかった。」（大沢）



研究による新しい発見によって、自分自身が成長していく

桜建賞

護国寺茶苑の形成過程とその特徴に関する研究—茶会記からみる使われ方の分析—

竹田 実紅さん（4年・建築史・建築論研究室）

8歳で茶の湯の世界に入った竹田さんが、その空間に興味を持ったことは自然なことだった。茶の湯はどこから来て、どんな空間の特徴があるのか？ 今日の茶の湯を理解するため、近代の茶の湯を見つめ直す研究を行うこととし、護国寺茶苑を対象に選んだ。

既往研究では個々の茶室の解説のみにとどまっているが、今回は、護国寺茶苑が形成された経緯とそこに込められた茶庵と魯堂の茶の湯観、建築観、そして茶室の使われ方と護国寺茶苑の性格を明らかにすることを目的とした。特に茶会記に着目し、護国寺茶苑

を会場とした茶会の内容を考察し、時代や茶会による使われ方の違い、使われ方から見る各々の茶室の性格を読み取った。結果、茶庵の「開かれた茶の湯」「道具重視」とする茶の湯観と、魯堂の「茶道具や古美術の鑑賞の場である」という建築観が絡み合い、機能性を重視した器のような茶室が建設されたことが分かった。

「今までずっとやりたと思っていたことがやれて、楽しかった。しかし、文学的にまとめられたものを空間に置き換えるに当たり、読んで理解し、図面化するということが最も大変でした」



人のつながりに支えられて、研究が最後まで行き着いた

桜建賞

中心市街地における回遊性向上に関する研究

—埼玉県越谷市中心市街地を対象として—

深山 大輝くん・村井 雄紀くん・伊藤 和広くん・高山 修くん（4年・都市計画研究室）

当初から再開発事業に興味があった深山くんたち。そんな中、埼玉県越谷市の駅前再開発で建てられたビルに空き床が発生し、3年たった現在でも埋まっていない現状を知った。事業内容よりも、中心市街地の衰退、さらにそれを引き起こす街の回遊性の低下が原因と考え、回遊性向上を目指した研究を行うことにした。

まず、来街者が中心市街地においてどのような施設を利用しているのか、また施設利用の組み合わせなどの追跡調査を行った。次に、来街者の意向を把握するためにアンケートを行い、中心市街地に要望のあ

る施設などを把握した。以上を調査・分析し、施設の種類のごとに回遊性向上に資する配置を提案した。

「アンケートやヒアリングでは、市民や市役所などの方々に協力してもらうことを厭わないことが大事だと感じました。これは、先生方や先輩に対しても同じです。自分から積極的に行動を起こさなければ研究は成り立たないと思いました。」

また、どうしても小さなことで悩んでしましますが、その都度、研究目的に立ち返り、ミクロ・マクロ両方の視点を常に持って、行動することが大事なのだ気付かされました。」（深山）





卒業設計

一つひとつの課題を解決できたときが一番楽しかった

桜建賞

原風景の再読記

一町工場からの学びとその転用までの旅路―

尾崎健くん（4年・佐藤光彦研究室）

数 年前、実家の隣の町工場がつぶれたことをきっかけに、その身近なテーマに取り組むことにした。実家の周辺を調査する中で、東京・大森エリアの町工場も同様の問題を持っていることが分かり、敷地を大森にすることとした。

失われつつある町工場を再読し、転換期を迎えるこの町に落としこむことを試みた。調査の結果、町工場は「3つの複合パターン」と「5つの構築物（階段、ベランダ、庇、ピロティ、作業用クレーン）」によって構成されていることが分かった。調査から町工場の現象をモデル化し、地域コミュニティの低

下から、必要性が問われていた小学校に転用させた。狭い敷地から生まれた町工場の現象は、都市型の狭い敷地に建つ小学校に豊かなオープンスペースを与え、失われつつある町のコミュニティをつなぐ。

「いくつもビルディングタイプを検討し、最終的なビルディングタイプを決めるのに苦労しました。夏から調査を行っていましたが、決まったのは冬になってからでした。途中、違う敷地に落とし込むことも考えましたが、どうしても自分の地元でやりたかったので、そこに必要とされるものがないと考え、小学校にたどり着きました」



卒業論文

テーマを考えるのは、旅の計画を立てるワクワク感と似ている

桜建賞

編み込みを用いた木質双曲放物面の形状形成に関する研究

一最小格子間隔の検討―

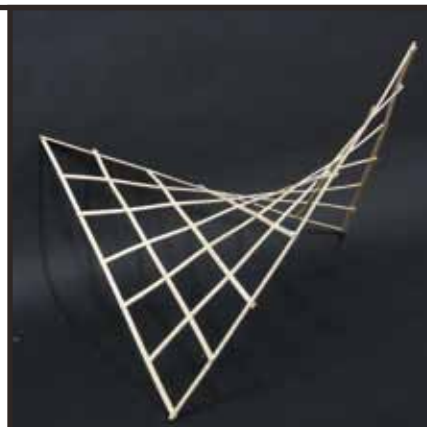
伊藤清香さん（短大2年・酒匂研究室）

先 生と対話していく中で、木材で曲面を表現することと、以前から魅力を感じていた寺社建築の曲面に共通点を発見したことが、この研究のきっかけとなった。

薄い形態、モニュメンタルなデザイン、大スパンの架構を可能にする双曲放物面は、一般的にRC造でつくられる。一方、木材で双曲放物面をつくる利点は、特徴を活かしたまま施工を簡単にし、RCとは違った様相にできる点だ。木材同士の交点は、ボルトなどの剛接合だと応力が集中し、予測不能な破壊が考えられるが、編み込むことで木材同士の交点

に生じる摩擦がボルトの代わりとなり、応力集中も生じずに剛接合に近い効果が期待できる。また、木材同士の間隔を詰めると剛性と耐力が増すが、木材の破壊する間隔は必ず存在する。本研究では、編み込みの最小格子間隔を検討した。

「曲げ試験は規模が小さく、実験装置や重りの載せ方も、一から考える必要がありました。格子間隔を確認するために制作した模型は、限界に達するのが近く、つくるのがとても難しかったです。でも、自分の興味のあることを考えるのは、旅の計画を立てることに似たワクワク感がありました」



卒業設計

大学で一番大変なことだけど、達成感や喜びは特別なもの

桜建賞

対話する森

一船橋市郷土資料博物館を中心とした多世代の学びの場―

磯部太一くん（短大2年・矢代研究室）

普 段なじみのあった船橋市薬円台公園に建つ郷土資料博物館をテーマとした。多くの郷土の歴史を抱える博物館は、1930年代に流行したが、近年は訪問者が少ない。郷土の歴史を、今暮らしている人や新住民に知ってもらうために、博物館が持つ学びの要素を公園と一体化し、多世代が学びを共有する地域の活動拠点にできないか考えた。

公園内に位置する郷土資料館の建替計画をもとに、市民の「対話するかたち」をメインテーマに、以下の5つのサブテーマを据えることで、「学びの集合体＝森」を創出させた。Ⅰ．歴史との対話：郷

土資料博物館による歴史文化の継承、Ⅱ．多世代との対話：五感を通じた体験・生涯学習、Ⅲ．公園との対話：動線・視線の連続性と緩急化、Ⅳ．広場との対話：多中心性を持つ外部空間の構成、Ⅴ．建築との対話：広場に開く開口部、領域性を形成する屋根群。

「なかなかイメージ通りに行かず、いろいろなタイプの模型をつくりながら、何度もエスキスを行いました。一番格闘したことは、屋根のデザインでした。公園や街道からの見え方を考慮して、リズムミカルな片流れの動きをつくりました」



建築学科による就職支援

「OBOGと学生との懇談会」開催

text= 山中新太郎 准教授

OB OGと学生との懇親会を、2016年2月16日（火）17日（水）に駿河台校舎1号館CSTホールで開催しました。これは、2010年度に桜門建築会の後援を受けて「就職セミナー」としてはじめられたものです。

開会に先立って行われたガイダンスでは、初日には戸田建設の市原卓さんから、2日目には鹿島建設の南谷修さんから激励の言葉をいただきました。今年は合計87社の企業・団体が参加し、16日には251名、17日には244名の学生が参加しました。前年度は、建築学科と建築学専攻のすべての就職者の40%以上が今回参加した企業・団体に就職しています。この結果を見ると、この場での「出会い」がいかに重要か分かります。90年以上の歴史を誇る日大理工建築であるからこそ、大勢のOBOGの協力が得られ、就職活動への強力なバックアップができるのです。

今年度の懇談会の特徴としては、大手のハウスメーカーがそれぞれ60名以上の学生と面談しており、建設会社が40名程度と続き、その間にマンションデベロッパーが混じるような形になりました。最初は知名度で会社を選びがちですが、日大理工建築のOBOGは大企業から中小企業までまんべんなく業界内に散らばり、それぞれの企業が請け負った業務を真摯に行っています。企業の規模や知名度だけでなく、企業・団体の内容をきちんと調べて、自分に合う就職先を見つけてほしいと思います。自分が大学院1年生・学部3年生になったら、懇談会に向けての準備を進めてください。■



懇談会当日のガイダンス（主任からの挨拶）



CSTホールの様子（ブース形式）



企業との面談の様子

News & Topics

2016 年度、新任紹介

阪本一生 助手

4月から建築学科の助手としてお世話になることとなりました阪本です。

私は日本大学1年生の頃に環境系の講義を受け、建築の音環境に興味を持ちました。それがきっかけとなり、大学院では床衝撃音に関する研究を行い、木造大断面実大モデルを使用した重量床衝撃音対策の実験などを行いました。

大学院修了後は建設会社で現場監督を勤め、奈良県でプール施設、県立病院、シンガポールでリゾートマンションの建設に携わり、人と建築の関係の奥深さを再認識しました。

そして、再び日本大学に携わることができ、嬉しく思っています。環境工学は建築空間の中で快適に生活するための重要な分野です。その中で、音環境に関しては集合住宅を中心に居住後の騒音に関するトラブルも非常に多く、課題が多く挙がっています。解決に向けて実験を通し、皆さんと一緒に研究を行い、考え、学んでいきたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。



さかもと・かずき：1988年岐阜県生まれ。2010年日本大学理工学部建築学科卒業。2012年同大学院理工学研究科建築学専攻博士前期課程修了。2012～16年株式会社奥村組。



左上：実棟での性能調査状況。
左下：大断面集成材を用いた実大モデル（船橋校舎にて実験）。
右上：天井裏で床衝撃音を測定状況。

堀切梨奈子 助手

建築計画、特に、まちなか・民家・広場などの“専門施設ではない場所で展開される芸術活動の場”の研究を専門としています。

幅広い建築分野からこのテーマを選ぶまでには、ヴェルサイユ宮殿に展示された巨大彫刻、劇場外演劇の上演空間を分析した先輩の修士論文、「演劇と建築は似ている」という劇作家の言葉など、それまで私が抱いていた「建築」のイメージを変えるいくつかの転換点がありました。

卒業後は、建物管理会社の技術部門で建物診断の仕事をしてながら、終業後や休日には美術館や劇場に足を運んだり、アートプロジェクトのメンバーとして活動してきました。

修士課程を終えて2年。まだまだ多くを吸収する身ではありますが、本学に籍を置き、先生方や学生の皆さんと、さまざまな角度から「建築」を考える機会をいただけることを大変嬉しく思っております。どうぞよろしくお願いいたします。



ほりきり・りなこ：1989年神奈川生まれ。2012年日本大学理工学部建築学科卒業。2014年同大学院理工学研究科建築学専攻博士前期課程修了（佐藤慎也研究室）。2014～16年日本管財株式会社。



左上：スタジオ 2 フロアを使った展示の1ブース。歌舞伎のお客さんを評した江戸時代の本「客者評判記」の要約を来場者と一緒に読み、会場内のお客さんを観察。だれかのみたゆめ 展示と実演(2014)。(写真＝川瀬一絵)
右上：大正時代に建てられた民家での演劇上演。地図を覗き込みながら会話をしている観客とパフォーマー。三宅島在住アートレス家《山手篇》(2012)。(写真＝富田了平)
左下：公民館全体を使った演劇の上演風景。広場には、役者3人と偶然通りがかった市民が混在する。豊島区在住アートレス家(2011)。(写真＝富田了平)

News & Topics

第22回ユニオン造形デザイン賞において

建築学専攻2年の齊藤佑樹さんが佳作を受賞

「第22回（平成27年度）ユニオン造形デザイン賞」（主催：ユニオン造形文化財団）において、建築学専攻2年生の齊藤佑樹さん（佐藤光彦研）の作品「思い出への液体ドア」が佳作Bを受賞した。テーマは「あなたの『どこでもドア』」。最優秀賞1点、優秀賞2点、佳作A2点に次ぐ佳作B5点に選ばれた。

第1回学生デザインコンペにおいて

建築学科4年の米田誉仙さんと池田貴大さんが優秀賞を受賞

「第1回学生デザインコンペー未来のとびらコンテストー《大学生版》」（主催：三協立山株式会社）において、建築学科4年生の米田誉仙さんと池田貴大さんの作品「まちの団樂～変わらない風景～」が個人住宅部門優秀賞（第2位）を受賞した。この部門は「ずっといたくなる家」をテーマに、人々がお互いに安心して触れ合うことができ、時間を忘れて心も体も寛げる住宅と、その暮らしのための建材への提案が求められたもので、応募総数は152点であった。

木の家設計グランプリにおいて建築学専攻2年の

西島修悟君が審査員特別賞 竹原義二賞・伊礼智賞を受賞

「木の家設計グランプリ（課題テーマ「となり近所との、いい関係をつくる住まい」）」（主催：株式会社 木の家専門店 谷口工務店）において、建築学専攻2年生の西島修悟さんの作品「凸凹邸＝近隣との距離を再考する＝」が審査員特別賞（審査員5名がそれぞれ1点ずつ授与）のうち竹原義二賞・伊礼智賞をダブル受賞した。本コンペは、将来、日本の建築を支える学生に、日本の木造住宅を今一度見つめ直し、その素晴らしさ、おもしろさを感じてもらおうと企画され、上位10名が最終審査会でプレゼンテーションを行った。

今村雅樹教授と建築学科4年有志が関東4大学と共同で

「町屋再生プロジェクト」を進行中

今村雅樹教授と建築学科4年生の小野良紀さん、平間祐太さん、増田俊さん、横山大貴さんが、工学院大学木下庸子研究室、東京理科大学安原幹研究室、日本女子大学宮晶子研究室、法政大学渡辺真理研究室と共同で「町家再生プロジェクト」を進めている。これは、上越市の依頼により「空家を活用した地域活性化に関する研究 地元大学生の街中居住推進に着目して」として進められているものであり、過疎化と高齢化の地方都市が抱える問題を典型的に示す新潟県上越市の伝統的なガングの街「高田」において、老朽化した町屋を「学生のためのシェアハウス」として再生し、まちなか居住と地元活性化を目指した提案を行っている。今年度は提案内容を含めた報告書を提出し、来年度は具体的な町屋再生の実施設計と工事を行う予定である。

第13回主張する「みせ」学生デザインコンペにおいて建築学科4年の下田麻穂さんが審査員特別部門賞を受賞

「第13回主張する「みせ」学生デザインコンペ」（主催：公益社団法人商業施設技術団体連合会）において、建築学科4年生（受賞当時：今村研）の下田麻穂さんによる作品「循環するみせ」が審査委員特別部門賞を受賞した。応募総数420点から選ばれたもので、審査委員特別部門賞は最優秀賞1点、優秀賞5点に次ぐ賞として7点が選ばれた。



齊藤佑樹さんの作品「思い出への液体ドア」



米田誉仙さんと池田貴大さんの作品「まちの団樂～変わらない風景～」



西島修悟さんの作品「凸凹邸＝近隣との距離を再考する＝」



「町屋再生プロジェクト」は、2016年3月4日（金）に行われた第3回住民意見交換会の様子

News & Topics

第17回シェルターインターナショナル学生設計競技2015において 建築学専攻2年の齊藤佑樹さんが入賞

「第17回シェルターインターナショナル学生設計競技2015」(主催:シェルター)において、建築学専攻2年生の齊藤佑樹さん(佐藤光彦研)の作品「身体的巨大建築 1386の部屋と1つの空間」が入賞を受賞した。テーマは「自由な建築」。応募総数199作品(国内77作品・海外122作品)から、入選6作品に選抜され、最優秀賞1点、優秀賞2点に次ぐ入賞3点に選ばれた。



齊藤佑樹さんの作品「身体的巨大建築 1386の部屋と1つの空間」



清水亮輔さんの作品「積層する界限 ラジオセンターの空間エレメントから導きだされた秋葉原的空間広場の再編」

歴史的空間再編コンペティション2015において

建築学専攻2年の清水亮輔さんが十等を受賞

「歴史的空間再編コンペティション2015 第4回「学生のまち・金沢」設計グランプリ」(主催:歴史的空間再編学生コンペ実行委員会、金沢市)において、建築学専攻2年生の清水亮輔さん(今村研)による作品「積層する界限 ラジオセンターの空間エレメントから導きだされた秋葉原的空間広場の再編」が第10位となる十等を受賞した。応募総数241点から選ばれたもので、1次審査(50点の選出)、2次審査を経て選ばれた。



齊藤佑樹さんの作品「共有される大黒柱 内の柱・外の枝」

キルコス国際建築設計コンペティション2015において

建築学専攻2年の齊藤佑樹さん、小関真子さん、川田実可子さん、 村田皓平さん、白木大一さん、敦賀谷俊さん、中辻千尋さん、 清水亮輔さんが受賞

キルコス国際建築設計コンペティション2015(主催:キルコス国際建築設計コンペティション実行委員会)において、建築学専攻2年生の齊藤佑樹さん(佐藤光彦研)による作品「共有される大黒柱 内の柱・外の枝」が近藤哲雄賞金賞と米澤隆賞銀賞と国広ジョージ賞佳作、小関真子さん(今村研)、川田実可子さん(古澤研)による作品「侵食する外はマチのイエとなる」が安井秀夫賞金賞と篠原聡子賞銅賞と能作文徳賞佳作、村田皓平さん(佐藤光彦研)、白木大一さん(同)による作品「旅する浮島水族館」が工藤国雄賞金賞と安井秀夫賞銀賞、白木大一さん、敦賀谷俊さん(佐藤光彦研)による作品「ひとつの家の窓からはじまる新しいまちのものがたり」が能作文徳賞金賞と米澤隆賞佳作をそれぞれ同時受賞した。また、中辻千尋さん(今村研)による作品「うつろう居場所」が五十嵐太郎賞佳作、清水亮輔さん(今村研、鳥居希衣氏(東京都市大学大学院)と共同)による作品「響き渡る波紋」が吉村靖孝賞佳作を受賞した。テーマは「内/外 Interior/Exterior; Making the Best of Both Worlds.」。応募総数461点から選ばれたもので、20組の審査員がそれぞれ金賞1点、銀賞1点、銅賞1点、佳作数点を選出し、ひとつの作品が複数の賞を受賞する場合もある。



小関真子さん、川田実可子さんの作品「侵食する外はマチのイエとなる」



白木大一さん、敦賀谷俊さんの作品「ひとつの家の窓からはじまる新しいまちのものがたり」



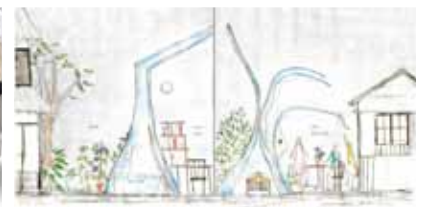
村田皓平さん、白木大一さんの作品「旅する浮島水族館」

宮里直也准教授らによる設計監修の日本初の総合災害訓練施設が完成

宮里直也准教授が関文夫教授(土木工学科)らと設計監修した、日本初の総合災害警備訓練施設が、近畿管区警察学校(大阪府堺市)内に完成した。この訓練施設は、広域災害時の警察官の救助能力を向上させることを目的としており、従来とは異なる総合的な災害訓練施設として、倒壊家屋を想定した地震ゾーンをはじめとする12施設が設計された。開所式には警察庁の金高雅仁長官が出席し、近畿管区警察局長の佐々木真郎局長から感謝状が贈呈された。

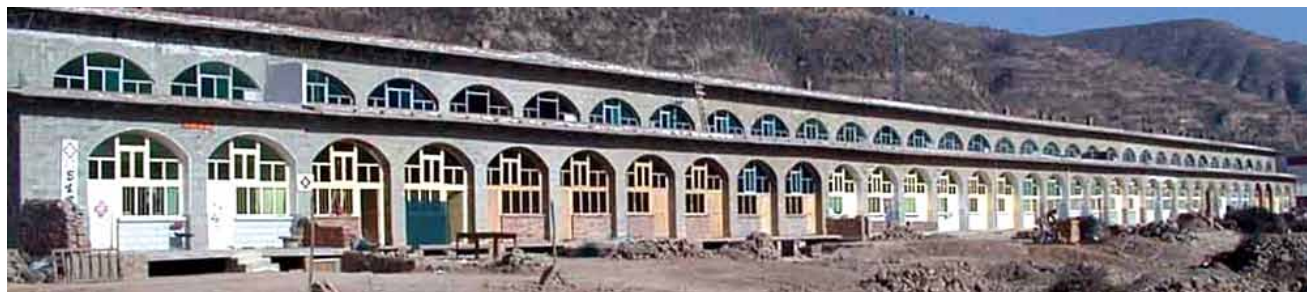


清水亮輔さんの作品「響き渡る波紋」



中辻千尋さんの作品「うつろう居場所」

「2度目の東京オリンピック2020」



吉野泰子（よしの・やすこ）

1975年日本大学理工学部建築学科卒業。1980年同大学院理工学研究科博士後期課程修了（工学博士）。日本大学工学部・生産工学部を経て現在、短期大学部建築・生活デザイン学科教授（建築環境工学専攻）。日本建築学会常議員・理事を経て、現在に至る。

The New Generation of Yaodong Cave Dwellings, Loess Plateau
中国黄土高原の新型ヤオトン（World Habitat Award 共同受賞）

「世界中の青空を、ここ東京国立競技場に集めた第26回東京オリンピック！」躍動感溢れるNHKアナウンサーの声が今も脳裏に焼きついている。開会式のファンファーレとともに入場行進がはじまる。あの感動を胸にひめた当時の私は、小学校6年生。東京オリンピックの記念すべき年として、クラス全員でプラスチック製の地球儀を制作し、学びたのメルカトル図法でプリントされた世界地図を一枚一枚丁寧にはりつけ、群青色の地球儀が完成し、その土台には、“1964年、東京オリンピックの年”と担任の先生がサインしてくださった。

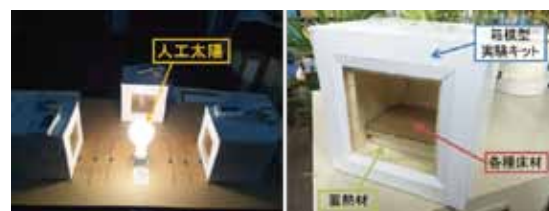
あれから52年、私は現在、日本大学の建築系初の女性教授として短大建築・生活デザイン学科で教鞭をとり、「地球環境時代」を見据えた住環境教育の普及啓発や国際学術交流に取り組み、2年後には定年を迎えようとしている。この間、日大理工学部・短期大学部で受けた恩恵は計り知れない。

中国西安建築科技大学の劉加平教授（院士）とは、20有余年日中共同研究にともに携わり、2006年には新型ヤオトン（黄土高原地中住居）の開発と普及で国連World Habitat Awardを共同受賞した。その後、モンゴル、チベット、雲南省、四川省、陝西省、新疆ウイグル自治区の伝統民家を訪ね、文科省科研費助成「中国西部地域における気候変動と健康に配慮した新型省エネルギー住宅構想」において、地場産業の育成と省エネルギー村落の両立を図り、ドイツ・ダルムシュタット工科大学へ建築学科第1号として留学実績を持つ銭さんの修士論文では、少数民族の要望を反映したパッシブハウスの厳格な設計手法を提示し、環境系大学院の優秀修士論文賞を受賞している。

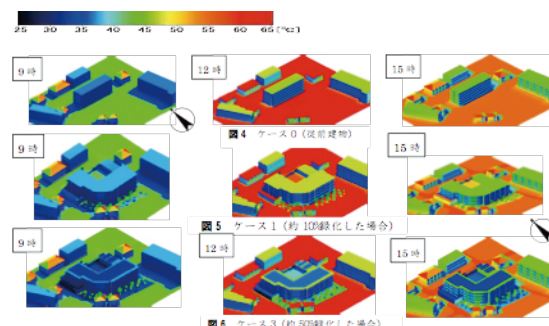
2011.3.11以降は、電力需給の逼迫による節電対策が要されたことに起因し、「ダイレクトヒートゲインによるリサイクル床材の蓄熱効果に関する研究」（短大桜建賞）としてまとめた冬季太陽熱を有効活用するダイレクトヒートゲインや、夏場の「緑のカーテン」の導入によりパッシブデザインの普及啓発を図っている。

また、2010年に「ザ・ライオンズたまブラーザ美しが丘」が導入した温熱環境simulationなどの導入実績（グッドデザイン賞受賞）により、2015年4月以降、株式会社大京と共同開発の「ライオンズパッシブデザイン」が新築全物件の標準仕様となったことも大きな成果といえよう。

来る2020年、夏季東京オリンピック・パラリンピックの屋内外会場整備に向けた建築界の果たす役割は極めて大きくなる。今後も、学生諸氏とともに再生可能エネルギーのベストミックスを求め、総力を挙げてヒートアイランド緩和・熱中症予防策等に取り組んでいきたい。



リサイクル床材の蓄熱効果に関する模型実験（住環境教育の普及啓発）



国土交通省超長期住宅先導的モデル事業採択の温熱環境シミュレーション
〈樹木＋芝生＋保水性舗装＋屋上緑化〉



吉野研究室と大京の共同研究成果「ライオンズパッシブデザイン」は、新築全物件で標準採用されている。①グリーンカーテン用フック、②換気ストッパー付サッシ、③大型給気口、④エコガラス、⑤通気ルーバー付扉、⑥換気機能付玄関ドアの6設備に加え、住宅性能評価は、省エネルギー対策等級4。

Contents

02 [SPECIAL FEATURE]

現役生から先生、OB/OGが伝えたい。
だから、建築は面白い！ 25

14 特集 | 速報！ 2015年度に受賞した 修士論文・設計 & 卒業研究・設計12

18 [REPORT]

OBOGと学生との懇談会 2016

19 [NEWS & TOPICS]

- ・ 2016年度、新任紹介
- ・ 第22回ユニオン造形デザイン賞において
建築学専攻2年の齊藤佑樹さんが佳作を受賞
- ・ 第1回学生デザインコンペにおいて
建築学科4年の米田誉仙さんと池田貴大さんが優秀賞を受賞
- ・ 木の家設計グランプリにおいて建築学専攻2年生の
西島修悟君が審査員特別賞 竹原義二賞・伊礼智賞を受賞
- ・ 今村雅樹教授と建築学科4年有志が関東4大学と共同で
「町屋再生プロジェクト」を進行中
ほか

22 [Architecture & Me]

vol.83 2度目の東京オリンピック 2020 (吉野泰子)

24 [EVENT REVIEW]

mosakiのイベント巡礼 vol.16

映画『もしも建物が話せたら』
世界の名監督6人が描く、6つのストーリー

SHUNKEN 2016 Apr. Vol.44 No.1

「駿建」

発行日：2016年4月1日

発行人：中田善久

編集委員：宇於崎勝也・佐藤慎也・井口雅登・長岡篤・古澤大輔・宮田敦典・山崎誠子・廣石秀造

編集・アートディレクション：大西正紀 + 田中元子 / mosaki

発行：東京都千代田区神田駿河台1-8-14 日本大学理工学部建築学科教室

TEL：03(3259)0724

URL：http://www.arch.cst.nihon-u.ac.jp

※ご意見、ご感想は右記メールアドレスまで<shunken@arch.cst.nihon-u.ac.jp>

event review

mosakiのイベント巡礼 vol.16

映画『もしも建物が話せたら』
世界の名監督6人が描く、6つのストーリー会場：渋谷アップリンクほか全国順次公開
2016年2月20日(土)～建物とお話し、
したことのないひとに

♥ 長いな、全部で3時間！ それにしてもヴェンダース、建築好きだねえ。以前、東京都現代美術館での建築展で妹島和世さん設計の建物も撮ってたしね。

♠ 今回の作品は、建築物を題材にした短編6作品を連続上映したもの。ヴェンダースは総監督かつ、そのうち最初に出てくる「ベルリン・フィルハーモニー」を撮った作品の監督でもあったわけだけど。

♥ 私さ、あの黄色い建物にCGで口がついていて、こんなにちわーとか喋りだす映画だと思ってたのね。

♠ んなワケ、ないじゃない。

♥ でも、意外とその空想が当たっていたっていうか。こんなに直接的に擬人化しているなんてね。

♠ 過半数の4作品が、建物が「私」と称して語っていたもんね。

♥ うん。ヴェンダース人気あるけど、個人的には今



回の作品には、ちょっと違和感があった。まずねえ、建物が「私」になる4作品のうち、3作品！ つまり今回上映された短編のうち半分で、ナレーションの声が女性。つまり建物を女性として描いていたんだよね。

♠ 女性じゃおかしい？ フランス語やドイツ語だと、建物は中性名詞らしいけど。

♥ うーん、私は建築に恋してるからなあ、なんだか不思議な感じ。さらに違和感があったのは、語られた内容からして、出てくる建物たち、自分の役割にすっごく自覚的で、謙虚だったんだよ！もう、控えめ過ぎるくらいに。

♠ それは、個人邸ではなく、ホールとか刑務所とか、いろんなひとを迎え入れる施設だからじゃないの？

♥ うーん、納得いかないなあ。建築って、受け身な

存在なんだろうか？そもそも、建てられた意味や役割に対して、そんなに忠実なんだろうか？

♠ 確かにね。6つの映像のうち、どれが好きだった？

♥ 私は最後に流れるボンビドゥー・センターかな。その建物で流れる時間や人のふるまいによって、表情を変えるところが好き。あと、建物が誇らしげでちょっと偏屈な感じも、ボンビドゥーに似合ってた。

♠ 全体に言えるんだけど、一人称で語る割には結構、説明がちなんだよね。空間の臨場感にそこまで迫っているという感じでもなかったし。どんな人が観るのに向いている作品なのかな、これ。

♥ あくまで、普段、建築の情報や知識に触れていないひとじゃない？ 建築とお話し、したことないひと。新鮮な題材だと思うし、建物の見方が変わる気がする。

Recommend | 2016年4月 - 6月

【1】「伊東豊雄展 空気をデザインするーみんなの森 ぎふメディアコスモスー」| LIXILギャラリー |

会期：2016年3月4日(金)～5月24日(火)

「みんなの森 ぎふメディアコスモス」(岐阜県岐阜市)は、2015年7月に開館して以来、既に60万人以上の人が訪れ(2016年1月時点)、周辺地域に新しい賑わいを生み出している。本展は「ぎふメディアコスモスの完成報告」、「オープン後どのように使われているか」、「この先の展望」の構成からなり、コミュニケーションの場の回復とその展望を探るもの。会場ではコンペティション時の資料から施工中の様子、オープン後、現在に至るまでを写真や映像、模型など多彩な資料で紹介する。

【2】「三分一博志展 風、水、太陽」| TOTOギャラリー・間 |

会期：2016年4月15日(金)～6月11日(土)

建築が“いかにして地球の一部になりうるか”を一貫したテーマとして作品をつくり続けている三分一の取り組みを、瀬戸内のプロジェクトに焦点をあてて紹介する。それぞれの建築が場所ごとの「動く素材」を通して、地球のディテールとして存在する姿を感じさせるとともに、設計段階での大量のリサーチデータや、実証実験の模型や映像、モックアップなどで、設計過程も見せる。

【3】「MIYAKE ISSEY展」| 国立新美術館 |

会期：2016年3月16日(水)～5月3日(火)

デザイナーの三宅一生は、1970年に三宅デザイン事務所を立ち上げ、つねに次の時代を見すえながら、新しい服づくりの方法論と可能性を示している。一枚の布と身体との関係を基本に、チームと取り組むさまざまな研究開発から生まれた衣服は、革新性と心地よさをかね備え、私たちの生活を活気づけている。本展は、三宅一生の仕事を通して、子供から大人まで、だれもがつかることの楽しさに触れられる展覧会。

[編集後記]

普段、私たち mosaki は、建築に携わるさまざまな分野の人々と日々接しながら、いろんな仕事をしています。日大理工へ足を運ぶと、先生方や学生たちともよく話をします。するとあるとき気付いたのです。分野や世代、立場が違えど、みんな実に楽しそうにしているなあと。その楽しさのサンプルを、新入生、進級生の皆さんに伝えたい！ そう考えたのが、今回の特集でした。登場していただいた25名の皆さんに聞いたのは、「どうして建築が、面白いのですか？」という質問でした。なかなか一言で語れるほど、建築の面白さは単純なモノではありません。けど、その中で25名の皆さんは、独自の視点で面白さを語ってくださいました。目にとまったものから、何となく読み進めてみてください。きっとどこかに、引っかかったり、共感できる文章があるはず。もしかしたら、そんなところから、あなただからその興味の芽が育っていくのかもしれないよ。(大西正紀+田中元子/mosaki)

「駿建」では、在学生、教員、非常勤講師の皆さまからの、コンペやコンクール、学会、スポーツ大会、その他の受賞・表彰に関する情報提供を下記メールアドレスにて受け付けています。＜shunken@arch.cst.nihon-u.ac.jp＞